

第七章 江戸辯に於ける京阪語の要素

(浮世風呂を中心として)

目録

- | | | | |
|----|-------------|----|------------|
| 1 | アンケート(馬鹿) | 14 | イカイ(甚) |
| 2 | 目口乾 | 15 | ナンダ(なかつた) |
| 3 | ノホウツ(不作法) | 16 | セウ(爲よう) |
| 4 | トビアガリ(お轉婆) | 17 | 面白ウ |
| 5 | トンチキ(あわて者) | | ヌ(打消) |
| 6 | ホンマ(本當) | | ジャ(だ) |
| 7 | スコタン(間違) | 18 | ハヅム(おこる) |
| 8 | ジャウケル(ふざける) | 19 | シヨビク(引く) |
| 9 | オムシ(味噌) | 20 | ネツカラ(全く) |
| 10 | ケニモ晴ニモ | 21 | ヤツト(大層) |
| 11 | 臺坐後光 | 22 | マツトウ(正直) |
| 12 | ナンボ(幾ら) | 23 | イツチ(一番) |
| 13 | オヘツツイサマ(龜) | 24 | アカスカベエ(赤目) |

- 25 オトツヒ(一昨日)
 26 オキド(臀)
 27 イシキ(臀)
 28 オマハン(お前様)
 29 イビ(指)

エバスカウ

ヒボ(紐)

テノゴヒ(手拭)

オホカメ(狼)

キンニヤウ(昨日)

フルダノキ(古狸)

ゼウリ(草履)

アンドン(行燈)

30 ホカス(葉)

31 ヤヤ(幼児)

32 オヒエ(布子)

33 ババ(糞)

34 ババア(乳母)

35 ダンパウ(檀方)

36 コナカラ(二合半)

37 ボサツ(米)

38 ヒヤツコイ(冷い)

39 ガ(値)

江戸辯は(一)京阪語、(二)關東語、(三)自生語の三から成立つて居ると思ふ。こゝには京阪語の要素を問題にしてみる。殊に、東日本に無くて、西日本と江戸だけにあるもの、つまり江戸が孤立

した島を成して居るものは、特に興味が深いわけである。(頁数は岩波文庫本による)

1 アンケツ

(四ノ下、二〇三ペ) サア片つ端から出しやばれエ。階穴めエ。(生辭の言葉)

天保の「大阪詞大全」に「あんけつとは あほうのこと」と出て居るから、大阪辯である事は確である。今日の分布を見ても、淡路・紀伊・讃岐・越前・若狹・飛騨・靜岡縣等、西の方に偏つてゐる。

秋田縣由利郡のアンケがアンケツの下略であるとすれば、東日本に於ける唯一つの例となるが、外には、關東・東北に無い。だから江戸は、アンケツに關する限り、島を成してゐたわけである。つまり、この言葉は、江戸の周圍に擴がらない内に減びてしまつたので、江戸にあっては、一時的の存在に止まつた。三馬の頃は、江戸辯は、もう、京阪語から獨立した權威を持つてゐたかと想像されるが、こんな喧嘩用語にまで、大阪辯を眞似て得意になつて居たとは案外である。もつとも、是は江戸の初期に京阪からの移住者が持つて來たものかも知れない。

紀伊日高郡のアンカチ、近江伊香郡のアンコチ、何れも、アンケツの訛だらう。淡路や紀伊下里町では、アホノアンケツといふ。

2 メクチカワキ

(三ノ上、一二一ペ) 人品の能風をして居て、とんだ目口乾だの。遊ばせの、入らッしやいと、たべつけねへ言語をしても、お里がしれらア。

これは、六十婆様が下女の惡評をしたのを、蔭で下女が聞いて居て、後で、婆の惡口をする條にある。さて、メクチカワキといふ言葉は今も名古屋にあつて、好んで他人の事を喋々する者をいふ。これは大阪辯である。北條國水の「晝夜用心記」に、「下女とおぼしき色姿、一人五十ばかりの目口かわきの婆なれど」とある。「元祿文學辭典」に、「目口渴。口も口も渴いてゐる義。輕薄で慾の深いこと。或は、艶氣のないこと。又、その人」とあるのは當れりや否やを知らない。少なくとも、「浮世風呂」には當てはまらない。

3 ノホウヅ

(三ノ上、一二六ペ) 野方圖な奴等ぢやアねへか。……ベツちやくちやノと、あくぞもくぞを算立て、……湯の中を口だらけにして、いけ騒々しいあまつちよめらだ。(中ツ腹の中年増の詞) 無遠慮・不作法・ふしだら等といふ様な意味であるらしい。元祿文學辭典には、ノフツモノを「横柄な人、のぶとい者」と譯してある。「近松語彙」には「圖太く賤しい者。無作法者」とある。

(相模入道千疋大) 生若い女の面に似はぬのふず者

(雙生隅田川) ヤア扱のふずもの、往還の道に横たはり、のさばり伏したは何奴
(傾城太太神樂) 一門もなき身の心やすさに世をはばかりぬ野風俗の友を集め、鶏飯のあばれぐひ
(諺草) 野風俗。いやしきことを野と云、野風俗は風俗のいやしき事也、のふうずと云は誤

(書言字考) 野風俗 俚俗常談

現在の分布は西日本に限られてゐる。

ノホウズ	放任者	静岡市附近
同	馬鹿	越前足羽郡
同	締りのないこと	若狹大飯郡
同	横着	近江八幡町
ノフゾオ	無遠慮、横着者、	志摩鳥羽町
ノフドウ	圖太い	三重縣尾鷲町
ノフゾウナ	同	和歌山海草郡
ノホゾウナ	同	同
ノホン	馬鹿	同 伊都郡

ノホウズ	なまけ	大阪府
ノホズ	無鐵砲	同
ノホーヅ	無頓着、大膽	神戸地方
ノフウヅナ	生意氣な	伯耆
ノフーヅ	ふしだら	出雲仁多郡
ノフヅ	しまりなきこと	松江附近
ノフーゾー	不作法、失禮	石見
同	驕慢、傲慢	備中浅口郡
同	圖々しう、鐵面皮	岡山市
ノフードー	没分曉	津山市
ノフーゾー	不作法、失禮	廣島縣
ノフードー	不適、横着	周防柳井町
ノフンゾ	しまりなきこと	阿波美馬郡
ノホーズ	同	同

ノフゾー	粗末	伊豫周桑郡
ノフウザウ	不作法	博多
ノフウ	粗野	筑前朝倉郡
ノフーゾーカ	生意氣	佐賀縣
ノフーゾモノ	横着者	肥前平戸
馬鹿が、「馬鹿に塞い」と副詞的に使はれる様に、ノホウヅも副詞としても使はれる。		
ノホード	澤山	千葉縣
ノホウヅ	同	岐阜市
同	途方もなく	三河北設楽郡
ノフソ	澤山、非常に	伊勢度會郡

4 トビアガリ

名詞に使ふ所と、副詞に使ふ所とは一致しない。が、接續しては居る。(千葉縣は別)

(三)の上、百七(七)豊猫といふ十八九のつぼとりもの。かんばんにいつはりなしの浮虚にて、ヲツトきなさいのとびあがりなるべし。(地の文)

大阪詞である。浪花聞書（文政）に、「飛あがり者 ひやうきんものなり」とある。「西鶴繼留」に「角前髪の若い者、同じ心の飛びあがりども四人」とあり、「西鶴俗つれづれ」に、「飛上の彌吉、算用なしの藤介」とある。「元祿文祿辭典」に、「突飛な言動をするもの。むかふ見ずの者。又、へうきん」と譯してある。今、日向高千穂町で輕卒者、福島市や大和吉野郡でお轉婆をトビアガリといふ。「浮世風呂」のは女藝者だから、お轉婆と譯してよい様である。

出羽庄内の「濱荻」に、庄内のトンテキと江戸のトビアガリとを相對してゐる。

5 トンテキ

（二の下、八二べ）いけつ太造な。てめへ獨り買切た湯じやアあんめへし、向三軒兩隣のつき合をしらねへとんちきだ。（あくたれと呼ばれたる、おしやべりの神様お舌の詞）

（四の下、二百三べ）何所だとおもつて騒ぎやアがるか。とんちきめらア。（中腹の生酔の詞）

「浮世床」にも「一向しきなトンテキだぜ」「トンテキごつぽう人だりむくれのよい」とある。これは、トンテキの訛で大阪辯である。近松の「蟬丸」「朝敵にもせよ、とんてきにもせよ、武士の一言論言より重し」とある。「元祿文學辭典」の「ひやうきんもの」は當らない。「近松語彙」の「まぬけのろま」は善い。しかし、原義は疎忽者である。

トントケ	粗忽、粗忽者	津輕
トンテキ	そこつなること	同
同	とびあがり	庄内（濱荻）
同	阿呆者	越後出雲崎
トンテツ	輕卒、疎忽	佐渡相川町
トンテキ	輕卒	信州伊那郡
トンテキ	愚者	駿河富士郡
トンテキ	お轉婆	岡崎市
トンテキ	あわて者	近江栗太郡
トンテキ	相手を罵る時	同 八幡町
トンテキ	まぬけ、のろま	紀伊日高郡

愚者をドンツクといふのは是とは別である。宮城・岩手・秋田三縣で、あわて者をトッキといふのは關係があるらしい。「書言字考」に、「俚俗謂ニ噪動ニ爲ニ突鼻」とある。このトッピとトンテキとが折衷した様な形である。江戸のトンテキは明和頃から流行詞と「嬉遊笑覽」にある。

6 ホンマ

(四の下、二百九べ) 何も角も本眞本式でなくツちやア見ても面白くねへはな
大阪辯である。浪花聞書に「ほんま 不_レ虚也」とある。今、近畿大部分、四國全部・廣島縣・尾張・
埼玉縣などにある。甲斐南巨摩郡では、本當をホンマクといふ。ホンマとホンクと複合した言葉であ
る。ホンクも大阪辯である。

7 スコタン

(前編下、五〇べ) 此やうに人の事ばかりわるくいふ人、おのれが床へはいると、すこたんをかたり
三味せんひきにいつばいあそばせ、きく人にわるくちをいはれ(地の文)

(四の中、一九二べ) みんな間違だ。(八百屋の詞)

(浮世床、九五べ) あの頃は人のうたふのは皆すこたんだの(蛸助の詞)

「嬉遊笑覧」に、江戸のスコタンは上方のスカタンの訛だらうとある通りである。但し、意味は少し
違ふ。江戸のスコタンは間違といふ意味だが、上方のスカタンは當が外れる事である。

(雙生隅田川) 此の軍介を東へ遣り、ほつかりすかたん_{サカタン}さんと、兎角、汝が詞とは、もんちも
んちに出る合點。

(續山の井) 下手の駒、待つにすかたん_{サカタン}沓代烏。現在の分布は加賀以西に限られて居る。

スカ(コ)タンクフ 當はづる

加賀能美郡

スカタンクフ

待ちぼうけ食はされたり、救されたり等する、名古屋

スカタン

間違

近江八幡町

同

失敗の事

奈良市

同

あて外れ

伊勢鈴鹿郡

スカチンコク

豫定に反した目にあふ

志摩鳥羽町

スカタン

間違、馬鹿

大阪府

スカタンクラウ

當が外れる

紀伊日高郡

スカタンクウ

同

神戸地方

スカクンラクフ

豫定通りにならず

因幡

スコトンヲ食フ

當にしてゐる臺を知らぬ間に取られて尻餅つく 岡山市

スカタンクハセル

だしぬく

福岡市

單にスカともいふ。「浪花聞書」に「すか 都て物事間違たる、江戸で云はなあいなど云處をかく

云」とある。今、美濃・尾張・紀伊・大阪・神戸・因幡・石見・周防・備中・備前などにある。やはり、「スカ食ふ」といふ。意味は「スカタン食ふ」に同じ。甲州南巨摩郡のスカヲクレル（だます）は、日本に於けるスカ領の最東限であり、意味も用法も大分違ふ。

近頃、新聞を見て居ると、「國策審議會總スカンを食ふ」「日産系の諸株總スカンを食ツて値下り」などゝあつた。關西のスカをなま覺えにした人が、「好かん」を聯想して、こんな使ひ方をしたと見える。

浮世風呂、三編上百九頁に「眞の拳と云ふ物は一二三四五六七八九といふものだツサ。五だの七だのといふは、大すかまたさ」とある。浮世床初編下五〇頁にも「内證へ廻つて見ると大すかまたさ」とある。やはり、間違といふ意味らしい。「郷土研究」三卷二號の南方熊楠さんの文に、「是等の心得無き者は毎々大鰻^{ウナギ}をやらかすので察すべし」とある。これは紀州田邊の方言かと思つて調べてみたが、見當らなかつた。他の縣にも無い。

8 ジャウケル

（前編上、十八ペ）コリヤ／＼じやうけるなく（四十男の詞）

「浮世床」にも、「なんだナ此子は。せうけなさんなといふに」とある。（初編上、二十七頁、藝者あ

だもじの詞）。子供などのフザケルことを言ふ。「落萩」に仙臺のジャバケル（ふざける意）と、江戸のジョウケルとを對照してある。「物類稱呼」にも、關東のデウケルがある。現在、新潟・長野・山梨・群馬の四縣にデウケルがある。長野・静岡・岐阜・愛知・福井・滋賀・奈良・三重・和歌山・大阪・徳島・岡山の各縣では清んで、ジョケル、又は、ジョウケルといふ。江戸のデウケルは、この大阪辯を訛つたものである。

（戀八卦柱磨）姫君のやうに、猫ちやうらかしてござつても濟まぬ事

（弘徽殿鵜羽産家）猫の子が親猫の取つたる鼠をちやうらかして逃すが如く
このチャウラカスは、チャウケルを他動詞にしたものである。

9 オムシ

（三ノ上、一二五ペ）おめへん所は味噌^{みそ}の糰煮か、（下女おさるの詞）

（三ノ下、一五〇ペ）中白とは四方の味噌^{みそ}でございますよ。（屋敷奉公のお初の詞）

海人蓼芥や長崎版日葡辭書補遺に、味噌の女房詞ムシがある。今、近畿全部・四國・岡山・福井・岐阜にある。

10 ケニモ晴ニモ

(二編上、六二べ) けにも晴にも一人の男だけに、あまやかして奉公にも用いせんから、今での後悔さ。

「癒着(不斷着)にも晴着にも」の意。唯一無二といふ事である。ケーモハレモ(肥前平戸) テニモハレニモ(越中、金澤) テニモハリヲモ(佐賀) 等、今もある。元祿頃の大坂辯である。

(傾城島原蚌合戦) かさいの郡司は一人の男子源六は勘當、けにも晴にもびはと申す娘

「元祿文學辭典」に、「何にもかにも。善いにも悪いにも」とあるのは、もう一息といふ感がする。

11 臺坐後光

(四の上、一七八べ) 南無三寶。夫をあなた能う御存でござります。イヤモウそれを御ぞんじでは臺坐後光しまひつけました。

「佛像どころか、臺座も後光も」といふ意味で徹底的にやる事。「夏祭浪花鑑」に、「脚腰たゝぬ老妻斬りはづさして臺座御光しまうてくれう」とある。今、「臺なし」といふのも是から來たかと思はれる。淡路で、「うか／＼と深入しよつたら、しまひにダイサンゴクやられてしもた」等といふ、このダイサンゴク(根こそぎ、残らずの意)も關係があらう。

12 ナンボ

(二の下、八六べ) なんぼ結構なお方でも、お嫁さんが悪いと、是非しつくりといかぬものさ(女

房の詞)

京阪語である。浪花聞書に、「何ボじや 幾等だ也」とある。朽木・茨城・埼玉・神奈川・東北全部にもあるが、それは江戸辯を通して學んだのだらう。江戸では微力な言葉であつたが、京阪語の光が背後にあるから、上品な言葉として、周圍にも傳はつたと見える。語源は何程であるといふが、なんぼ程(一九二頁、上方者の詞)といふ使ひ方もある。

13 オヘツツイサマ

(二の上、六三べ) いぢにかゝつて、お龜さまへ液を吐はな。(七十婆の詞)

大坂辯である。浪花聞書に「ヘツすいさん 龜也。如斯さまを付いふ也」とある。今も大阪市でヘツツイサンといふ。香川県小豆島・土佐も同様。備中からはヘツツリサンと報告されて居る。この外、敬語の附くのを集めてみると、オカマサマ(備後、山口市) オカマサン(佐渡) オクダハン(大阪府) オクドサン(播磨・丸龜・伊豫) オクドハン(京都市・大阪市・讃岐・阿波・伊豫) オコージンサマ(豊後) カマノン(薩摩) クドハン(越後の昔、伊豫) コウジンサン(大和・兵庫) サンボーサン(兵庫) などがある。これらは皆、龜を火の神の依りましと考へた名残である。南島の伊江島では、かま

どをビナカンといふ「火の神」である。元來ヘツヒは竈の神といふ意味である。「伊呂波字類抄」の人倫付弟神類に「竈神 ヘツイ」とある。「出世景清」に、「かまど賑ふへついで殿」とあり、「元祿文學辭典」に、「へついでのかまどの神様、又、かまどのあるところ」とある。

竈に敬語を附ける習しは關東・東北には無い。但し、もし、カマダン（常陸・下總）がカマドノの訛であり、カマヤ（上總・埼玉・相模等）がカマヤンの訛であるとすれば、關東にも在る事になる。

14 イカイ

（二ノ下、九七ペ）年玉に能^い迎^{ちか}て おらが所じやア、いかいこと買たよ（下女の詞）

（三ノ下、一三二ペ）是見よがしにいかい事尻をおならべだ（ひやうきん者の神様の詞）

（四ノ中、一八二ペ）イエあの時代は肥^は腹^{はら}な事がいけへことござへましたよ（太鼓持の詞）

浮世床にも、いかい氣兼（六七ペ）いかい事女が揃った（七一ペ）いかい事ある（九六ペ）いかいお力落しで（百三ペ）等がある。

イカイの分布は近畿大部分、山陽道・石見、東の方は千葉・埼玉・東京・新潟・山梨・静岡・富山・岐阜・愛知・福井にある。東北・四國・九州には無い。

15 ナンダ

過去の打消を、關西ではナンダといひ、關東・奥羽ではナカツタといふ。これは東西兩方言の著しい相違として知られて居るが、不思議にも、江戸だけは、近い頃まで、ナンダの専用であつた。見落しがあるかも知れないが、浮世風呂・浮世床を通じて、ナカツタは一箇所も無い様である。ナンダの例なら、幾らもある。「浮世風呂」では、知らなんだ（八一ペ）來なんだ（一一二ペ）出來なんだ（一二二ペ）ふまなんだり（一二〇ペ）教^{おし}なんだり（一二五ペ）があり、「浮世床」には、しらなんだり（三三ペ）しらなんだ（四四ペ）思はなんだ（六六ペ）がある。

16 セウ

「爲る」の將然形を、西日本ではセウ（せう）といひ、東日本ではショウ（しょう）といふ。所が、江戸では兩方を使つた。割合はセウの方が遙に多い。セウ（八八ペ、九一ペ、九八ペ、九九ペ、一二二ペ、一二七ペ）、吳^{くれ}う（八三ペ）くりよ（百三ペ）させう（百ペ）等。同じ人が關西系と關東系とを、チャンボンに使ふ場合もあつた。浮世風呂百頁のおしつは藝者かと思はれるが「おらもの、角琴柱^{かくしんち}はチト來^きたから、打直^{うちなお}させうと思ふよ」と言つたかと思へば、すぐ次には、「ム、そう仕やうヨ」「ひよつと直が出來たら、片身頃^{かみきり}づみ分^{わけ}やうじやアねへか」と言つて居る。この類では、「見やう」（一六ペ）

「來よう」(一二四べ)「借やう」(一二三べ)「出来やう」(八二べ)がある。

(三ノ下、一四三べ) あの方はまアゆるしもせようよ。

これは、「許す事も出来ようよ」「許せようよ」の意味である。「許しもしようよ」とは意味が違ふ。

浮世床の方はどうかと見ると、關西系、せう(18 39 43 47 52 27 76 96) 下されう(94)、關東系、呉やう(22 22) 見やう(25) 負やう(101) 着やう(103) とあつて、ショウは見當らない。

この頃は未だバイがあつた。「浮世風呂」に來べい(80) やるべい(83 127 192) 居べい(127) きめべい(128) しべい(203) まかせべい(206) 爲べい(166) 行べい(166) 這入べい(167) 飲べい(171) 「浮世床」に、しべい(9) 來べい(10) 呉べい(10 23) 買べい(28) 見べい(59) しかるだんべい(60) この外にも多い。これによれば、四段動詞には終止連體形に付き、その他の動詞(上一段、下一段、加變・佐變)には將然形に附いた事が判る。

17 面白う

(三ノ下、一四五べ) 至極面白ううけ玉はります(歌人かも子の詞)

(四ノ上、一七八べ) 能う御存でござります(商人體の男の詞)

(前編下、三二べ) おめへ達ア能う喧嘩アするぜへなア(子供の詞)

關西では「面白う」、關東では「面白く」と言ふのが普通であるが、たまには右の様な使ひ方もある。

前者は歌よみの詞だから、わざと京都辯を使はせたとと思はれるが、次のは商人の言葉である。しかも、同じ人が、同じ時、同じ處所で、同じ人に向つて、同じ話の内で、「能^よ座藏を御存でござります」とも言つて居るのである。「浮世床」では、二編下の金鳴屋のお袋が、よくウ音便を使ふ。

口短でせわ／＼しうくらししますから

蟲氣でひさしうしくほくいたしてをりましたが、

この外、文法上注意すべきものとしては、打消にはナイ(ネへ)とヌとを使ふ。シは全く使はない。シは上方者の印と認められて居た。「浮世床」に、巫女が大阪うまれの人形遣ひの口を考せる段、せめ(おれ)は草葉の蔭には不居けれどナ。杉の木蔭ながら、ゑらううれしはいやい。

浮世床の見物、竹「こはいもんだの。巫女の言まで大阪になつたぜ
しかし、大阪辯なら、キンよりも、ヲランと言ふべきではあるまいか。

デスは「風呂」「床」ともに、一箇所も無い。デゴザリマスかダか、どちらかである。「おれと同じ事だス」(一二二べ)このスは感動詞で孤立したものである。十六頁の隠居は、ジャを三回、ダを一回、ガラウを一回使つてゐる。

18 ハヅム

- (二ノ上、七四べ) 山「おどるのか」かみ「さいな」山ム、。わつちが負たら鯰うなぎを貳朱はづまう」
(四ノ中、一八五べ) けち「折ふしは、あたりのある桃なら五ツか、ズツトはづめば、西瓜の安賣
三十八文でも遣らんなん」

ばんとう「それがはづみかエ」

(浮世床、二十べ) 是でもはづむ所では随分切れて見せるよ(隠居)

ハヅムは大阪辯である。浪花聞書に、「はり込 衣類などりきみたる也。又はづむともいふ」とある。
今、越中・近江・志摩・大和・紀伊・和泉・淡路・土佐等にある。おどる意である。

(生玉心中) 芝居果に長作が銀持つて来るが、爰へもばつとはづまうし

(博多小女郎波枕) 油斷召されな、人參用ひて養生が第一、持合せた、はづまうと蓋を開き

(壽の門松) 三百兩は亭主にはづむ

(心中重井筒) 草板一粒はつとはづみ

(好色一代男) 江戸に無い珍しい物じやと、亭主に一包はづむ

(西鶴置土産) 近日着物羽織拙者はすむでござる

19 ショビキ出す

(三ノ上、一二六べ) 片端からしよびき出して、一軒々々に斷ねきりへきやアならねへぞ(中腹の中年
増)(四ノ下、二〇三べ) 片ばしからしよびき出して張くぢいてやりやアいい。(男みの詞)

「かたこと」に「偽いつはりり出す」といふことを、すびくといふは如何。をびくは、偽りてそゝのかし出すこ
ころ歟」とあり、「丹波通辭」にも、ソビクをオビク(偽引)の訛としてあるが、慶長八年の長崎版日
葡辭書によれば、スビクには、(一)弓の弦を少しく引きて、張りの強さを試む、(二)人の心をスビ
イテミル(人を試す)といふ意味があつた。今シブク(山形)ショビク(下總・相模・伊豆)ショブ
ク(下總・伊豆)ソビキダス(甲斐)ソビク(石見・長門)ソビク(日向・肥後・薩摩)などと言
ふ。意味は、引く、引張る、引摺るに同じ。スビクは見當らない。福岡・大分二縣でスビクといふの
は痛むことである。日葡辭書のいはゆる「スチガスビク」(身體にリューマチなどの疼痛を感ず、下の
語)がこれである。

20 ネツカラ

(前編上、一四べ) ねつからわからねへ

(二ノ上、六三べ) ねからわからず(地の文)

(二ノ上、七五べ) ねつからこまらね

(三ノ上、一一八べ) 根から白粉がのりません

(三ノ下、一三五べ) 根から分やかりません

(四ノ下、二〇七べ) 根からわからぬ

下には必ず打消が来る事になつてゐるが、次の例は唯一の異例である。

(三ノ上、百八べ) ねつからおかたじけ (藝者の詞)

浪花聞書に、「ねから ねつから也」とあるが、實は、江戸でも大阪でも、ネカラ、ネツカラの兩方を使つたのである。現在の分布は、秋田・仙臺・山形・福島・埼玉・佐渡・静岡・美濃・三河・尾張・福井・三重・和歌山・大阪・兵庫・岡山・香川・徳島・愛媛・大分・佐賀・鹿児島、その他にも多からう。常陸では、「根ツカラ葉ツカラ」といふ。

21 ヤツト

(三ノ下、一三四べ) お睦むつの方がやつとおいしうございますよ (おかみ様の詞)

不思議な言葉である。外には見當らない。「浮世床」にも無い。若狹・神戸・播磨・但馬・淡路・美作・備前・出雲で、ヤツトといふのは澤山といふ事である。「浪花聞書」にも、「やつと 多也。餘福程也」

とある。若狹・大阪府・丹波多紀郡では、ヤートとも言ふ。古語イトの後裔であるらしい。江戸のヤツトは、大阪のヤツトを轉用したものだらう。

22 マットウ

(二ノ下、八八べ) どんな男でも正直で律義まつとうな人が能うございます (下女の詞)

「かたこと」に

正直の人を、またうどういへるは出所や侍らん。またき人ぞなど云は、空そらきといふ略成べし。それを誤りてばし云そめたと葉敷。但直人と書てたなうととよめり、其類成へき敷。然は眞人と書て、またうどうよむべし。

易林本節用集に、「完 正直也」とあり、下學集の増補に、「完 正直人也」とある。「長町女腹切」に「私がさもし心から、律義りつぎまたい半七に惡根性がつきそめ」とある。「全漸兵制」の日本風土記に「至誠人莫な打許多」とあるさうである。「物類稱呼」に、「律義なる人を、中國にて、まてな人と云。畿内及東國にて、またうどと云。案に「まてな人」又「またうど」共に全もつと人と云事也」とある。現在の分布は次の通り。

マテ

丁寧

青森・秋田・山形・宮城・長野

マテ	儉約	青森・秋田・岩手・宮城・長野
マヂー	丁寧	岩手・宮城・山形・福島・長野
同	儉約	青森・宮城・福島・長野
マテダ	大人しい	山形東山川郡
マチョウナ	正しい、完全な	相模
マテ	真正直	甲斐・越中
マッテイ	正直	越中
マテナ	柔順な	金澤市
同	正直な	美濃武儀郡
マチョウナ	よく働く	飛騨大野郡
マタイ	物にうとい	福井縣嶺北
マト	同	同
マテナ	實直な	大阪府
マタイ	鈍緩	近江八幡町

マチョウニ	眞面目に	紀伊日高郡
マタイ	大人しい	同 同
同	溫順	淡路
マクエ	大人しい	岡山市
マクイ	弱氣な	高松市
同	柔和な性質	阿波美馬郡
同	弱い	高知市
同	大人しい	福岡縣京都郡
マットージン	几帳面な人	長崎市
マチョモン	お世辭をいふ者	肥前五島岐宿
マトナヒト	正義の人	日向高千穂町
ジマクナ	眞面目な	出雲母里村
ジマクイ	物を大切に取扱ふ意、 幾分吝嗇の意味あり	周防柳井町

(二ノ下、八五ペ) 利も非も禰はず我子をしかるのが一番能うございますよ
越後・長野・静岡・岐阜・愛知・福井・三重・奈良・和泉・兵庫・中國大部分・四國全部・福岡・佐賀・長崎にある。石川縣ではイッチョニといふ。關東・奥羽には全く無い。江戸は孤立した島を成して居る。京都辯を移入したものだらう。

(史記抄、文明) 士卒ノ一チ賤シイ者ト同様ニ衣食シテ

24 アカスカベエ

(前編下、三一ペ) 其時にやア、あかすかべえだらう (男の兒の詞)

アカンペーの事である。今も、アカスカペーロ (岡山市) アカシ、コニコペー (豊後) アカシヤコペー (豊後) アカチャコペーロ (肥後) アカチャカベエ (長崎) アカチャコペー (豊後) などと言ふ。

アカンペーの語源は赤目かと思ふが、「駄目だ」といふ事を、アカン、又はアカスカといふ所では、それを聯想して、アカスカペーとしたのだらう。アカンの分布は、近畿全部・四國全部・鳥取、東の方は福井・岐阜・愛知・静岡まで來てゐる。關東・奥羽には全く無い。この言葉は、アクと肯定に使ふ事は稀で、アカン、アキヤセン、アケセンと否定に使ひ、又は、アクカア、アクカエ、アクカイロ、

アカスカと反語に使ふ。さて「行かん」をイカスカ、「明かん」をアカスカといふ語法は、今日も、愛知・岐阜に残つて居る。静岡縣ではイカズカと濁る。肯定はイカズである。これはイカンス (行かん) とす) の訛である。

これを要するに、關東では、(一) 駄目をアカンとは言はない、(二) 打消のンは無い、(三) 反語のアカスカといふ語法は無い、(四) アカスカペーは江戸以外の關東に無い。以上四の理由によつて、これは西方からの移入語である事は明である。その源は京都だらうと思ふ。これによつて、京都にも、アカスカといふ語法があつた事が推定される。

25 オトツヒ

(三ノ上、一〇八ペ) あの、先一昨日の、ヲヤ、先一昨日と云ちやア、最う去年だのう (藝者の

詞)

片言、浮世鏡、浪花聞書、丹波通辭ともに、オトツヒとある。現在の分布は、近畿・中國・四國を主とし、東の方は佐渡・三河が限りであるらしい。埼玉縣にも在るが、是は江戸辯を通して學んだものである。

26 オトツヒ

(三ノ下、一三二一) 前駐衆は尻が低い。最う些高^とくたアのウミイミアスツ
これは「前駐衆は音頭が低い」といふ盆踊唄のバレ唄である。しかし、唄に限らず、江戸では尻を
オイドと言った。「和合人」でも讀んだ記憶がある。魔屋の長崎版日葡辭書に、女の敬語として、ヲ
イドがある。現在の分布は、埼玉・富山・石川・福井・岐阜・近畿全部・中國全部・香川・愛媛・大
分にある。土佐では、イドスといふ。

オキドの語源は御居處^{おゐど}であるといふ。醒睡笑の「そちは何とてわがゐど。こゝろを聞いたぞ」は尻と居
所とを兼ねたものだと言ふ。この頃は尻をキドコロと言ったか。

27 イ シ キ

(三ノ上、一二〇一) 細^{ひよ}も茶屋子の縮緬を幅廣に仕立て大きな尻へ巻つけます(人情のよき神様の
詞)

(三ノ下、一三二一) 是見よがしにいかい事尻をおならべだ(ひやうきん者の神様の詞)
舊言字考にチンキとあり、今も川越市や淡路でさう言ふ。昔は盛岡にもあつた。上總夷隅郡では、

訛ツてオシキといふ。

28 オ マ ハ ン

(二ノ上、五六一) おまはんのは誰にお結はせだ(藝者の詞)

(二の下、七九一) おまはん何のまねをさつしやるのだエ(女の詞)

(三ノ上、一一一) おまはんも、いらざる世話やき爺だネ(年増藝者の詞)

(浮世床初編中、三四一) 友達の女房は、小意氣で婀娜^{あなだ}で、夫者^{おれ}あがりか鯨合^{くじがひ}あがりで……ヲやお
まはん何であります、ふうたさい(註、利いた風の倒語)だよ。きつい洒落さ。なぞといふ浮
世者がいふ。

オマハン^{オマハン}は女(殊に藝者)の言葉であるらしい。現在の分布は、相模・越後・甲斐・静岡・越中・
美濃・尾張・近江・紀伊・大阪府・播磨・出雲・讃岐・阿波にある、島原半島や日向都城ではオマハ
といふ。この分布から見れば、大阪が元であるらしい。

29 イ ビ

浮世風呂百十頁、浮世床二十四頁に指とある。

「片言」「浮世鏡」にイビとあり、今も京都市でイビといふ。その外、關東・北陸・中部・近畿・
中國・四國・九州に多い。日本館譯語には惹^ひ必とある。

この種の訛も、調べてみれば、京阪起原のものが多い。左に、二三を示す。

鯉子講（五七べ）「片言」卷三に「夷を、えべす」

細（二二〇べ）「伊呂波字類抄」に「絃、申納」

手拭（二三べ）古語である。片言に「ぬれたる物をのごふを、ぬぐふとは如何。五音を通じて聞

あしき敷」とある。

狼（八一べ）「片言」「文祿舊譯伊蘇保物語」

昨日（八一べ）「片言」にキンノウ、キニヨウ

古狸（八一べ）「片言」にタノキ

草履（八〇べ）「片言」に「じやうりはいやしきといふ人あれども外も苦しからず」

行燈（八〇べ）「片言」に「二字ともに唐韻なるがゆへに、あんどんよしと云り」

30 ホカス

（二ノ下、八〇べ）わつちを掻捕て放下込んだと思ひねエ（おしやべりのお舌の詞）

京阪語である。ホカス（山形・静岡・若狭・近畿全部・土佐・筑前）ホーカス（能登）ホカル（岐阜市・名古屋・香川・筑前）ホウカル（美濃・尾張・周防・長門）ホークル（安藝・周防）ホーケル（因幡）ホウラカス（加賀）ホーカラカス（久留米）ホカラカス（福岡市）等。山形縣と静岡縣とを

除けば、日本アルプス以西に限られてゐる。山形縣（最上郡）のは江戸を通して學んだのだらう。關東一帯には無い。九州も、入口以外には無いから新しい言葉である事が判る。従つて、「落窪物語」の「北の方、當に着せ奉れど、ほかし給ふにや」と直接の關係があるかどうかは疑はしい。「書言字考」の

放下 投

ホカス

は無論關係がある。「物類稱呼」に、關西のホカスを、東國のホウルやウッチャルと對照してあるが、實は、ホウルも元祿時代の京都語であつたのである。浪花聞書（文政）の編者は江戸人と思はれるが、それに、「ほかす。うつちやる也」とある。當時、江戸では、ウツチャルが主で、ホカスは、有る事は有つても、珍しかつただらう。

31 ヤ

（二の上、六二べ）幼さまがお乳におこまりになさらぬといふお呪でございます

ヤヤの分布は、福島・長野・三河・近畿（三重以外）・鳥取・石見・廣島・愛媛・高知にある。福島の江戶から學んだものだらう。

（心中二枚繪草紙）胎内のまだ見ぬやゝの別れぞ

(松風村雨東帶鑑) 一夜添乳の手枕は、やゝより親に許せかし
(俳諧古選) 兒の親、手等厭はぬ時雨かな
(俚言集覽) 嬰兒をやゝと云……京師の俗に生兒を稱せり

32 オ ヒ エ

(三ノ上、一二一ペ) 着物なども手まめに洗濯でも致て夜なべに熨で置けば、さば／＼とした布子
も着られますのに (「たべつけねへ言語をする」お神様の詞)

三ヶ尻浩さんの報告 (國語研究、三卷六號) によれば、京都の堂上の女房言葉に、襦袢をオヒヨと
いふさうである。オヒエはオヒヨの訛であらう。江戸人の貴族趣味にも驚く。この言葉は、京都以外
には見當らない。

33 バ バ

(三編上、一二七ペ) おそれるほどなら湯も浴せず、小くなつて屈かたみんで居べいが、猫糞ねんぽんで、しやアし
やアまち／＼だ。

(四編下、二〇三ペ) 猫が尿ねんぢやアすまされねへぞ。何所だとおもつて騒ぎやアがるか。

ババは糞の幼な言葉である。今、(東北) 青森・岩手・秋田・山形・(關東) 埼玉・神奈川・(中部)

山梨・靜岡・岐阜・愛知・(北陸) 福井・(近畿) 滋賀・三重・京都市・大阪・和歌山・兵庫・(中國)
鳥取・岡山・廣島・山口・(四國) 徳島・愛媛・(九州) 福岡・大分・長崎・熊本にある。佐賀縣から
はババ、鹿児島市からはベベと報告されてゐる。

ニャは猫の幼な言葉。今東京市では、ニャーゴ、又は、ニャー／＼と言ふが、紀伊・阿波・伊豫
ではニャーと言ふ。猫は糞を垂れた後で、砂を掛けて隠す。だから、隠して知らん顔をして居ること
を、「猫糞」又は、「ニャーがババ」と言つたのである。今も拾ひ物を私する事などを、「猫糞をきめ
込む」と云ふ。婆の字では意味を爲さない。

「猫が尿」、このガの使ひ方も注意すべきである。「おいらが所」(三十二ペ) の様に、代名詞の下
に來たのなら珍しくないが、名詞の下に來たのは珍しい。

34 バ バ ア

(二編下、九八ペ) 對乳母だちちが大きくじりだ。

(浮世床、五七ペ) そこでおころびだと乳母ちちち大きくじりだ。

ババはママの訛だらう。ママは乳母の古語である。「枕草紙」「源氏物語」「東鑑」などにある。
今も、美濃山縣郡殿美村でママ、三河南北設樂郡でママ、尾張知多郡でママサ、松江市でマンマと

いふ。昔は、盛岡・關東・尾張・筑紫にもあつた。(杜陵方言考、小兒必用養育草、物類稱呼、水がはり) 書言字考に「乳母」とある。この頃は京都にもあつたか。訛つてバア(大和) バアヤ(上總・金澤) バイヤン(大阪市) バツパ(磐城) バツバ(肥後) バンバ(金澤・長崎市) バンバア(佐賀) バンヤン(島原半島) などと言ふ。

35 ダンパウ

(四編上、一七五べ) 氏子や檀方はいふもさら、無縁法界ひりくるめに、一切衆生に救はれて、易林本節用集に、「檀那——方。越」とある。「片言」に、「然れば此等のこと葉は出家沙門より、俗方に對して、檀方ぞ旦那といふべきことなるを……」とある。「守貞漫稿」に、「菩提寺、及諸寺社トモニ、信者ニテ、常ニ米錢等ヲ供スル家ヲ、旦那或ハ旦那家、旦那トモ云フ」とある。岩手縣や宮城縣では、昔は侍を、今は巡查や官吏を、ダンボウ、又は、ダンボと言ふ。石の巻のダンボは主人、福島市のダンボウも主人、常陸猿島郡のダンボーは旦那、山形縣東田川郡のダンボは、三十歳乃至五十歳位の男をいふとある。

36 コナカラ

(三編上、一二七べ) もんぢいで四文二合半ときめべし

京都市・大阪市・神戸市・靜岡縣などで、二合半をコナカラといふ。昔は仙臺にもあつた。相州高座郡大野村のコナカラは五合と報告した人があつたが、二合半の思違ひだらう。甲斐だけは、樹の單位が違ふので、ナカラは三升の八分の一、コナカラは三升の十六分の一といふヤヤコシイものである。

37 ボサツ

(四編下、二〇二べ) 此まづ縁をおこぼしなすつた事は。これもおありがたいお米から分身いたしたものでござります。巾さは菩薩様をかやうにまづ、栢榴口へまきちらしてお捨なさるといふは

.....

佐渡や飛騨で、米をボサツといふ。清良記に「米を菩薩と申し候事、種子の時は文殊菩薩、苗の時は地藏菩薩云々」とあり、毛吹草に「菩薩實が入ればうつむく、人間實が入れば仰ぐ」とある。盛岡では、米をゴクともゴクボサツとも言ふ。

38 ヒヤツコイ

(四編上、一七一べ) 氷水あがらんか冷い。
(四編上、一七六べ) 水は皆冷いに規した物だ。

ヒヤンコイ（宇都宮・川越・静岡）ヒヤコイ（美濃・紀伊・京都市・大阪府・神戸・廣島縣）ヒヤカイ（伊勢）ヒヤケイ（相模）ハッコイ（秋田）ハッケ（盛岡）など今もある。

39 ガ

（四の上、一七一べ）四文がくだつし

大阪市のガンの訛である。語源はガネ（金）かと思ふ。ガ（静岡・美濃・安藝・周防・石見・土佐）ガタ（豊後・日向・豊後・肥後）ガツバ・カリ（島原半島）ガツ（島原・鹿兒島市）ガナ（宮城・福島・山形・和歌山）ガト（佐賀・豊後・種子島）ガチ（島原）ガチ（福岡）ガン（和歌山・播磨・岡山・山口・香川・愛媛・島原）ガトコロ（出雲）ガトバ・カイ（天草）ガノ（備中）ガンノ（京都市）ガントコ（京都市・播磨）等と今も言ふ。

△……………▽

以上の合計四十九語。内、訛音十、文法關係六、單語三十二、其他一（アカスカベエ）である。右は、すべて、京阪起原である事の明かなものばかりである。この外、方言分布が西日本（親不知、濱名湖線以西）にも及ぶものが、「浮世風呂」の廢語の内に、三十二語ある。分布が東日本（親不知、濱名湖以东）に限られてゐるものは、「浮世風呂」の廢語の中では、わづか四語だけである。ヒョグ

ル（遊る）、オンベイカツグ（御精擔ぐ）、ヤヲモノヤ（八百屋）、ジャ〜バル（強情張る）が是である。この内ヒョグとオンベイカツグは江戸に發生した生粹の江戸辯と認められる。ヤヲモノヤは今上總にあるが、「浮世風呂」では上方者が使つて居るから、果して江戸辯かどうか疑問がある。又、ジャ〜バルは今日駿河富士郡にあるだけで、他の縣には見出されないから、その發生地を確める事ができない。

江戸辯にして、西日本に分布して居るものは、すべて發生地が京阪であつたと考へてよい。なぜなら、江戸辯は西日本に進出する勢力は無いし、京阪語以外のむけの出合言葉なら、それを江戸人が眞似るはずはないからである。京阪語なら、當時の標準語だから、江戸人も眞似るし、西日本全體にも擴がる勢力がある。さて、私の調べた「浮世風呂」の廢語八十五語の内、京阪語である事の確なもの四十九語（五割八分）、西日本にも分布してゐるもの（京阪起原と推定されるもの）三十二語（三割七分）、東日本に限られてゐるもの四語（五分）となる。即ち、生粹の江戸辯は、多く見積つても五パーセント、あとの九十五パーセントは京阪語の借用である。たゞし、こゝに注意すべき事は、文化頃の江戸辯は、同時代の京阪語の借用ではなく、慶長頃の京阪語の輸入である事である。江戸開府當時、京阪からの移住者が多かつたと言ふから、その頃の京阪語が、移住者によつて江戸に運ばれ、そ

れが文化文政頃まで及んだのだらう。この間に、本家の京阪では、言葉の上に一大變化が起つたが、江戸では依然として、慶長・元和時代の京阪語を使つて居たので、文化・文政時代の京阪語とは違つたものとなつた。それは地方的相違といふよりも、むしろ時代的相違である。たとへば、三馬は、江戸のタコ（紙鳶）と、上方のイカ、イカノボリとを相對して居るが（風呂、一五三べ）、何ぞ知らん、タコも元禄時代の京都語であつた（書言字考）。文化の頃の江戸辯の本質は慶長頃の京阪語である。文化・文政頃になつて、初めて、京阪から輸入した言葉は、むしろ少ないかと思ふ。だから、「借用」とか「模倣」とか言ふのは實は語弊がある。早く言へば、東北人が北海道に移住して、東北辯を使つて居る様なものである。

×

×

×

第二に注意すべきは、關東に於ける江戸辯の影響は意外に弱かつた事である。先にあげた四十九語の内、訛言や文法關係は除き、單語三十二語について、現在の方言分布を調べてみると、次の通りである。意味や語形の甚しく違ふものは、二分の一として計算した

合計

一縣平均

東北地方

三一・五

五・二

關東地方

二八・〇

四・一

北陸中部

八三・〇

九・二

近畿地方

一〇一・〇

一四・四

中國地方

四五・〇

九・〇

四國地方

三六・五

九・一

九州地方

三一・〇

四・四

下段の數字は、上段の數字を縣數（四國なら四）で割つた商である。この方がよく實勢を現はしてゐる。これによれば、近畿が一番多く、關東が一番少ない。江戸辯といふも、實質は京阪語であるから、近畿地方に残存率の最も高いのは不思議が無い。不思議は關東地方の最低である。ともかく、慶長以來二百年間江戸に行はれた言葉ではないか、それが周囲に對して、これほど無力であつたとは驚く外はない。江戸だけは京阪語を使ひ、しかも其の周圍は關東方言である。だから、江戸は言語の島を成して居た事は確かである。

今日の東京辯は昔の江戸辯の後身である。だから、亦京阪語の系統を引くものと言はなければならぬ。しかし、文化以後に於ける江戸辯の變遷も甚しいものであつた。たとへば、「浮世風呂」の中

には廢語が約百語ある。つまり、最近百三十年の間に、少なくとも百語を喪失したわけである。文法については、その變化は單なる新陳代謝ではなく、本質的であつた。(一)ベイの廢止、(二)ジャの廢止、(三)ヌの廢止、ナイの專用、(四)チンダの廢止、ナカッタの採用、(五)善ウの廢止、善タの專用、(六)セウ(seru)の廢止、シヨウ(syau)の專用、(七)ノの廢止、ネの專用、(八)デスの採用——これらの目まぐるしい變化は、文化文政から明治維新まで、僅五六十年の間に完成された。今日の東京辯は生れてから百二三十年にしかない。東京辯と江戸辯とは、單に時間的相違あるのみならず、文法上、本質的相違がある。東京辯には、關東方言の要素が非常に多くなり、それだけ、京阪語の要素が減つて居る。だから、東京辯は、江戸辯と違ひ、京阪語の系統であるとはかり言ひ切る事は出来ない。近世になつて、關東方言が江戸辯に大影響を及ぼし、それを變化させた事は稀有の現象と言ふべきである。都會の言葉が田舎の言葉を同化するのは普通である。關東方言(ナイ、ナカタ等)が江戸辯を征服したのは、この逆を行つたもので、變態である。

東京辯の發生は、今後、學者の研究すべき好題目である。これを研究しない者は東京辯や標準語を論ずる資格無しと言つてよい。